

## 終戦直後の思出

長谷川, 正文  
元明治鉱業勤務

<https://doi.org/10.15017/13736>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 13, pp.204-205, 1984-12-25. 九州大学石炭研究資料センター  
バージョン：  
権利関係：

## 終戦直後の思出

長谷川 正文

昭和二〇年四月に、私は九州の明治鉱業の明治鉱業所から北海道の昭和鉱業所炭山に転動を命じられた。戦争末期で米軍の爆撃が激しく、危険を避けて山陰線、北陸線を利用したが、昭和鉱業所炭山に着任したのは九州では桜の盛りであったのに、昭和鉱業所炭山では雪がいちめんに残っていたことである。この炭山には従業員が一六〇〇名位で外に組夫も大分いた。一六〇〇名のうち、朝鮮労務者が約六〇〇名、中国労務者が二八〇名いたように記憶する。

深い森の谷間の流れに添う狭い土地に杜宅が段々畑のようにして建てられ、外見的には平穏な炭山であった。しかし外国人労務者が日本人労務者よりはるかに多い炭山だけに、敗戦後の騒動が次々に起った時、その対処に悩まされた。

中国労務者は一ヶ所の寮に起居していて、日本語の解る者は通訳以外は誰れもいなかったたので日本の敗戦のことも知らず平常通りに働いていたが、他炭鉱の中国労務者の指導者が昭和鉱業所に連絡に来て、日本の敗戦を知らせ、我々は戦勝国の者で、日本人の指示に従って働くことはなにとアジったので、忽ち騒動が起った。彼等の食糧である麦粉が粗悪なものだと言って横に流れる谷山に何袋も投げたり、また杜宅内を横行したりするので、みな恐怖を感じていた。

その日私の管理下にあった日本人労務者の寮に寄り調べものをしていた時、ひとりの少年が駆込んで来て私に紙片をくれた。手帳を破ったの

に走り書きで、「この少年と一緒に来てもらいたい、助けを乞う」と言う意味のことが書いてある。時間は午后四時頃であった。私は少年に案内されてだいぶん離れた山林の熊笹の繁ったところに導かれた。

そこに坑内係員一人と坑内夫の先山の五名とが車座になって笹の中にいる。みな中国労務者の指導をしている連中である。少年に他の人に話さないよう口止めして帰した後事情を聞く。五名の坑内先山はこの炭山のボスで、その中のHという坑内夫は特に暴力的で腕力も強く坑内外で恐れられていた。坑内では中国人労務者を指導していた。他の者もそうである。五名の者は中国労務者に対して苛酷で、少しのことにも暴力を振っていたので彼等から憎まれ恨まれていたのである。

日本の敗戦を知り、日本人に屈従することはないと知った時、日頃の恨みが爆発して、今日、多数の中国人が坑口に押しかけ、昇坑するのを待ったのである。昇坑して来たら殺気立った彼等が暴力を振うのは明らかで、坑口事務所からすぐに坑内に知らせ、六名の者は山の裏側に抜けている排気坑口へ逃れ脱出して来たのである。

私はどうしたらよいか処置に迷ったが、自宅の方にも彼等は探しに行つたと思われるので、次のことを指示した。

山を下りたところの杜宅に空屋があるので暗くなったらそこに入つて待つこと。家族にはこちらから知らせ、人々が寝静まった頃、弁当と着換えと旅費等をもって空屋に行くように伝える、用意ができたなら国鉄恵比

島駅まで歩いて、一番列車で各々頼る家に向うこと。以上のことを決め私は課長に報告して、夜勤の労務課員に指示してもらおうようお願いして家に帰った。恵比島から昭和駅まで一七軒道らしい道がなくて線路を通って出ていた。終列車は六時に着いて以降は動かず、脱出に都合がよかった。翌朝六名の者は無事脱出したことを知らせてもらい安堵した。

事件らしい事件ではなかったが、当時の雰囲気からして、もし逃れることができず中国労務者に捕えられたらどんな結果になったか、そして中国労務者の、その後の行動が当然暴力化したことが想像される。

中国労務者は九月の終り頃帰国した。管理者のK氏は彼等を愛していたので慕われていたが、そのK氏外二、三名の職員が船まで引卒した。出港したのは山口県仙崎港ではなかったかと思う。

朝鮮労務者が帰国し終ったのは十月の終りであったと記憶する。中国人、朝鮮人労務者が去った後、労務者は三分の一になってしまい、出炭は激減し、更に労働問題が激化して当時の鉱業所の幹部の人たちの心労は大変であったと想像される。労務者補充が急務で、労働課の大半が、各地に募集に出た。募集の標語にしたのは「炭坑は米の配給が充分ある」ということで、これは当時では大きい魅力であった。その後樺太からの引揚者で補充ができたのは翌年になってからである。